

「古事記」の稲羽素兎に外用処置 された蒲の穂綿—考

き 木 むら 村 まさ 雅 かず 一

キーワード：古事記，蒲（ガマ），穂黄（ホオウ），穂綿（ホワタ），大国主命

要 旨

「古事記」の稲羽素兎の項で、素兎がくるまったのは穂綿？穂黄？と疑問の生じた蒲（ガマ）について考察した。一般的には童謡の「大黒さま」で歌われて、皮をむかれたシロウサギはガマの穂綿にくるまって本の膚に戻ったと思われている。しかし古事記で大国主が素兎に指示したのは穂黄である。

穂黄とは？蒲のどの部分なのか？また穂黄には薬効を示す成分があるのか？を調べた。また蒲の穂、蒲の穂綿そして、穂黄のそれぞれの違いと区別も説明した。

そして、皮をむかれた赤膚の「稲羽素兎」に塗布された穂黄（ほおう）は雄花穂の花粉で、多くの効能を有しており、今も使われている生薬の代表的なものであった。

はじめに

『古事記』は元明天皇の詔により712（和銅5）年、太安万侶が撰録した歴史書である。撰録から既に1300年という年月を経ている。

『古事記』に記されている稲羽素兎神話は、いなばのしろウサギとして童話や童謡にも歌われ、広く知られている。例えば、1905（明治38）年の石原和三郎作詞、田村寅蔵作曲、尋常小学校唱歌「大こくさま」は次のような歌である。

1. おおきなふくろをかたにかけ、だいこくさ

まが きかかると、ここにいなばの しろウサギ、
かわをむかれて、あかはだか

2. だいこくさまは あわれがり「きれいなみ
ずに みをあらい がまのほわたに くるまれ」
と よくよくおしえて やりました（以下3, 4
略, 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』1958
（昭和33）年 岩波書店）

サメに毛をむしられ、赤膚にされ痛くて泣いて
いるシロウサギの傷が大国主命のいうとおり、蒲
の穂綿にくるまったところ、もとの膚に戻った、
というのである。

古事記「稲羽素兎」の項においては、おおくにぬしのみこと大国主命
は素兎に「急いで、そこの河口へ行き、淡水で体
を洗い、その河口の穂黄を取り、敷き散らし、そ